

# 文化

## 花と子ども の画家

いわさきちひろ  
生誕100年

松本 猛 ⑭

松本善明との出会いから半年後、1950年1月に結婚したちひろは翌年の春に長男猛(筆者)を出産する。善明は時代の混乱の中で失職し、弁護士を目指すことになった。ちひろは絵筆一本で夫と子どもの生活を支える決意をする。しかし、自炊もできない6畳一間の下宿での子育ては困難を極めた。

### ヒゲタ醤油の広告を担当



「ヒゲタ醤油広告」1965年(ちひろ美術館所蔵)

## 生活がかかり必死で描く

「生活はきびしくわれを子と離つ／ありあけの麓のさどに子をだきつ／くろき子の瞳かなし

く乳をすう／子のひとみかがや

赤き風車／祖父の胸に吾子

軒にたち／生活はわ

れにきびしく子と離つ／汽車の

窓は小雨にぬれて 子ときかり (とおさかりの古語) / 父母よ 守りませ 子の母遠ければ」

必死で絵の仕事を探し、収入を得る努力をしているちひろの元に、幸運が舞い込んでくる。

ちひろの絵が、戦後のアートディレクターの草分けで、ヒゲタ醤油の宣伝を担当していた川崎民吾の目に留まったのだ。川崎は、消費者の日常に入り込む

広告を作るために新しいイラストレーターを探していた。ちひろが婦人運動や平和運動の新聞や雑誌に描いていたカットは働く女性や子どもたちだった。川崎はちひろに連絡し、スケッチを持ってくるように言った。絵を見た川崎は、その時の印象を後にこう記している。「エンピ

ツの軽い素描で、子供が多く若い主婦達もいて、いろいろな仕ぐさが画いてありました。どれも都会調で、親と子の愛情に溢れたイラストでした。(中略)

雑種の仔犬がいる。仔猫がいる。お誕生日にはショートケーキを食べるが、ふだんのオヤツはお母さんが焼いてくれたクッキーか…、こんな感じのものでした。

私は嬉しくなりましたね。ちひろはヒゲタ醤油のイラストレーターとして採用された。

川崎の注文は厳しかったが、生活がかかっていたちひろは必死で日常生活の中に女性や子どもたちの魅力的な姿や表情を探し、描き続けた。ちひろの絵は新聞紙上にしばしば登場するようになり、「ヒゲタの絵描きさん」として世の中にファンが増えていった。

(美術評論家)

土曜日に掲載します